

—シュガーロード—

長崎街道の歴史をひもとく

長崎から広まった砂糖文化
砂糖がもたらした豊かな食文化




講師の赤瀬浩先生

昨年12月17日(金)に長崎市長崎学研究所長の赤瀬浩先生を講師に迎え、第65回菜の花会「砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～」をオンライン形式で開催し、会員・市民22人が参加しました。

1571(元亀2年)長崎開港以来、長崎は世界に開かれた唯一の公式な窓口でした。海外からもたらされた情報や物産は、長崎から全国に広まり、なかでも珍重されたのが砂糖でした。

陸揚げされた砂糖は、海外から伝わった菓子調理学とともに長崎街道を辿って福岡県・小倉まで伝わり、街道沿いを中心に砂糖文化を発展させます。

2020年にはこの一連の砂糖文化「シュガーロード」が文化庁の日本遺産として認定されました。

熱帯の植物であるサト

ウキビは17世紀まで日本では栽培できなかったため、遣唐使や遣明船などでわずかな量がもたらされるだけでした。薬として珍重されますが、口にするのは一部の上流階級だけでした。

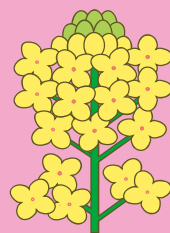
その状況を変えたのが南蛮船の来港です。当時の貿易船(ガレオン船)は、バランスを取る重りとして寄港地であるマカオや中国で安価に入手できる砂糖が使用されていました。貿易相手がスペイン・ポルトガルからオランダに代わっても、砂糖は依然、ニーズの高い輸入品でした。

菜の花通信

〓家族向けニュース(ご家族の方にお渡しください)〓

Vol. 52

■発行■
長崎県保険医協会
菜の花会



菜の花会 世話人募集中です

菜の花会は会員家族の会で、楽しく、為になるバスツアーや講演会等を開催しています。現在、一緒にイベントを企画していただける世話人を募集中です。
興味のある方は、事務局までお問い合わせください。



▲出島表門橋（長崎市出島町）

大量の砂糖が長崎に陸揚げされるようになり、出島内の砂糖蔵で嚴重に保管されました。砂糖は温度変化に敏感なため、油断すると糖蜜に変化します。時には航海中に溶けてしまい、船底に溜まった糖蜜を掬いだしていましたが、売値は下がりますが、この糖蜜も売買されていました。

当時の砂糖の価格は1kg 5000円程度。しかし、長崎の住人は1000円程度で購入できる特

権があったため、大阪などの商人に5倍の価格で売ることが可能でした。砂糖は長崎に莫大な富を与える存在だったので

砂糖が儲かると知った唐人屋敷でも小規模ながら砂糖を扱うようになり、最盛期には取扱量が2000トンにのぼったという記録があります。



安価に手に入る上に、日本で高値がつく砂糖商は大変良い商売でしたが、何より砂糖は現金と同じように贈り物としても喜ばれていました。

例えば、馴染みの遊女に2000銀、約1・2トンを上限に渡すことができていましたが、そんな大量の砂糖一遍に渡されても困ります。でもその砂糖を長崎会所（長崎に設置された幕府の貿易機関）に持っていくと、



▲長崎会所跡(長崎市上町)

会所を通じて販売され、その売り上げを手数料なしで全額を遊女は受け取ることができました。これを「もらい砂糖」とよびました。

また、砂糖を運ぶ際に袋が破けてこぼれた砂糖は、運んでいた人足が貰うことができました。この「こぼれ砂糖」を専門にした買い取り業者が33軒あったことから、砂糖がいかに貴重だったかが分かります。しかし、わざとこぼす者が続出、損失が多くなったことから、予め人足には手当分



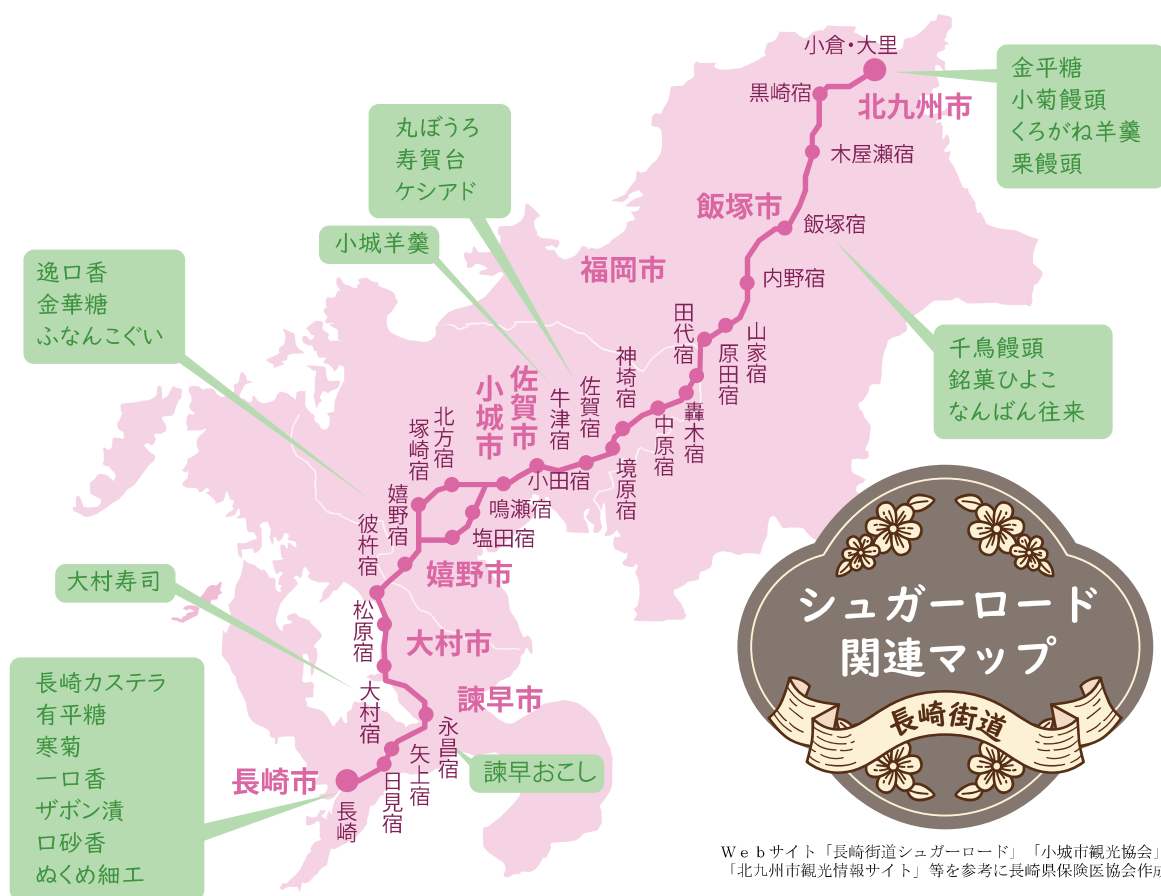
の砂糖が渡されるようになりしました。「もらい砂糖」やこうした手当に使われる砂糖は持ち込まれる砂糖の4分の1に上ったといわれています。



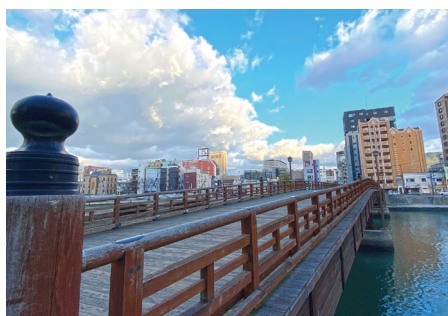
「長崎街道」とは、江戸時代に整備された主要な脇街道のひとつで、豊前小倉常盤橋を起点に、長崎札ノ辻に至る25宿57里（約230km）の道程です。現在の福岡県・佐賀・長崎を結び、7日ほどの行程でした。ちなみに、



▲長崎街道起点、札ノ辻跡（長崎市桜町）



Webサイト「長崎街道シュガーロード」「小城市観光協会」「北九州市観光情報サイト」等を参考に長崎県保険医協会作成



▲常磐橋（北九州市小倉）

長崎市新大工町に「長崎街道ここに始まる」と刻まれた碑が立っています。が、実際の起点は今の長崎市役所バス停付近です。江戸時代は中心地であるこの場所に高札が立っていました。反対側の起点は小倉の常盤橋ですが、厳密には海岸沿いにある長崎奉行所の出張所があった大里（だいら）です。

長崎は幕府直轄地として長崎奉行が治めていましたが、長崎港を警備す

る武士はいませんでした。そのため、佐賀藩と福岡藩が1年交代で長崎港の警備に当たっていました。毎年1000人ほどの藩士が駐屯していましたが、彼らも長崎町人と同じ価格で砂糖を購入する特権が与えられていました。また、両藩から菓子職人が修行の場を求め来崎し、その技術を藩に持ち帰りました。そのうち長崎街道では宿場ごとに工夫した甘味が提供され、舌の肥えた人たちにも通用するようにならざるを得なかった結果、今



▲陸海の要所塩田津（佐賀県嬉野市）

日まで伝わる銘菓が誕生することになるのです。



各地で生まれた銘菓を紹介します。

まず、長崎の特産品でもある「ザボン漬け」は、ポルトガル人が船上生活でのビタミン不足による壊血病予防のため、セイロン（スリランカ）で見つけた大きな柑橘類を手元にあつた砂糖に漬けて保存食としたことに始まります。ザボン漬けのお陰でポルトガル船は日本まで航海ができたのです。長崎には他にも、



「寒菊」「カステラ」「桃カステラ」「よりよ菓子」が生まれました。

諫早・永昌宿の「諫早おこし」はお米が豊富にとれる米所ならではの菓子です。大村・大村宿の「大村寿司」は、お菓子ではありませんが、その味付けにはふんだんに砂糖が使われています。大村藩領だった西彼杵郡地域の郷土料理でもあります。

佐賀の小城・牛津宿は「小城羊羹」が有名です。小城には、名水百選にも選ばれている清水川の本流である祇園川が流

れていて、羊羹作りに適していました。嬉野宿の「逸口香」は長崎の「一口香」と同じ製法・材料で作られています。こちらの方が空洞が小さく、平たい形であることが特徴です。佐賀宿は「丸ぼうろ」。「ぼうろ」はポルトガル語でケーキという意味です。

福岡・内野宿、飯塚宿の「千鳥饅頭」は、昭和の初めに生まれた、筑豊炭田で働く人たちに愛されたお菓子です。シュガーロードは、古いお菓子だけではなく新しいお菓子も含まれています。終点の木屋瀬宿、黒崎宿



の「金平糖」は、16世紀にカステラなどとともにポルトガルからもたらされたお菓子です。ポルトガル語で砂糖菓子を意味する「コンフェイト」が語源です。



このように、シュガーロードには過去の栄光だけではなく、その歴史を糧に、今もなお、菓子文化が発展し続けているということが重要です。気軽に遠出が出来るようになりましたら、ぜひシュガーロードの各地を巡っていただきたいと思います。



特にやりたい事があつた訳ではないが、コロナのせいで2年間を無駄にした気分である。が、コロナの御陰で225冊読んだ。私の数少ない趣味は読書である。

中でも『鬼平犯科帳』全24巻にはまり、江戸時代にタイムスリップして、大いに楽しんだ。食通で知られる池波正太郎氏は美味しそうな食べ物描写が多く、思わずヨダレが出てしまう。やつと最終巻に入り、どの様

に終わるのかなと思つていた矢先に、鬼平役の中村吉右衛門さんの訃報が届いた。奇しくも作品は「作者逝去のため未完」の記述で突然の終了。どうもすつきりしない。残念。今、私は「鬼平ロス」かも。

たぶん私は活字中毒なのだ。苦手な本はあまりない。と、思っていたが、最近の受賞作の大半が残念な事に私の心に響いてこない。何を言いたいか理解できない。良



文／長崎市千々岩マリ子

寄稿

読書中毒



さがわからないのである。年取ったという事であらう。

でもまあいい。洋の東西を問わず、好きな作家さんは沢山いる。コロナがどんなに長引いても、読む本には困らない。やるべき事をサボって読書三昧の生活に、後ろめたさを感じつつ、今日も読書に現をぬかす私である。

因みに好きな作家と、お勧めの作品。

- ・吉村昭『戦艦武蔵』（新潮社・初版発行1966年）
- ・山崎豊子『沈まぬ太陽』（新潮社・1995年）
- ・宮城谷昌光『奇貨居くべし』（中央公論新社・1997年）

・米原万里『オリガ・モリソヴナの反語法』（集英社・2002年）

・司馬遼太郎『坂の上の雲』（文藝春秋社・1969年）

・三浦しおん『舟を編む』（光文社・2011年）

・ケン・フォレット『永遠の始まり』（SBクリエティブ・2016年）

・ジェフリー・アーチャー『クリフトン年代記』（新潮社・2013年）

・ジェフリー・デューヴァー『スキン・コレクター』（文藝春秋社・2014年）

その他大勢
概して長い作品が好き
なようだ。





最干潮時に現れる白洲（リソサムニューム礁）

白洲（リソサムニューム）は年に一度数回、南島原市の原城跡の沖合に浮かび上がる白い浅瀬で、世界でも珍しいものと言われています。この浅瀬は珊瑚と異なり極めて珍しい植物の一種で学名「リソサムニューム」と言われています。普段は海中に沈んでいるため見る事ができませんが最干潮前後に一部が浅瀬となつて現れ、船で上陸することが出来ます。世界中でも珍しく、インド洋、イギリス海岸と原城沖の3カ所で見ることが出来ます。



豊かな自然を育む有明海

去年は3月30日から6月26日の14日間だけの運行だったのが最後の日に申し込み、でかけました。出港から10分程で白洲に到着し、40分程上陸できます。金平糖のような形をした石灰藻が集まってできた白洲を歩くと、まるで海の真ん中を歩いているような気分になりました。家族などに見せようと石灰藻を沢山持ち帰りました。なかにはタコなどが浅瀬にいてツアー参加の子供たちが喜んで捕まえている光景が見ることができないというのを新聞で見つけ、早速申し込みました。

ども見られました。船頭さんの話では日によって潮の引き方に差があるらしく参加した前日の方がより浅瀬が広く現れていたということでした。40分程の上陸でしたが初めての経験で楽しい時間を過ごすことができました。年によって日程や当日の出発時間が異なるようです。これを読んで興味を持たれた方は一度経験されることをお勧めいたします。出発する浦田港には、温泉も食事をするのできる施設もあることを付け加えておきます。



見学ツアーの詳細は、
「原城温泉真砂」
☎0957-85-3155
にお問い合わせください